

区分別科目	創傷管理関連		時間数 (法定)	35 (34)
特定行為名	(A) 褥瘡又は慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去 (B) 創傷に対する陰圧閉鎖療法			
担当指導者	久保田 良浩（医師）西井 洋一（医師）高田 聡（医師）北山 稔大（医師）伊庭 治代（看護師）加藤 好美（看護師）仲原 英人（医師）日並 淳介（医師）我如古 理規（医師）			
学すべき事項	(共通) 創傷管理関連の基礎知識	1. 皮膚、皮下組織（骨を含む）に関する局所解剖 2. 主要な基礎疾患の管理 3. 全身・局所のフィジカルアセスメント 4. 慢性創傷の種類と病態 5. 褥瘡の分類、アセスメント・評価 6. 治癒のアセスメントとモニタリング（創傷治癒過程、TIME 理論等） 7. リスクアセスメント 8. 褥瘡及び創傷治癒と栄養管理 9. 褥瘡及び創傷治癒と体圧分散 10. 褥瘡及び創傷治癒と排泄管理 11. DESIGN-R に基づいた治療指針 12. 褥瘡及び創傷の診療のアルゴリズム 13. 感染のアセスメント 14. 褥瘡の治癒のステージ別局所療法 15. 下肢創傷のアセスメント 16. 下肢創傷の病態別治療 17. 創部哆開創のアセスメントと治療		
	(A) 褥瘡又は慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去	1. 褥瘡及び慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去の目的 2. 褥瘡及び慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去の適応と禁忌 3. 褥瘡及び慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去に伴うリスク(有害事象とその対策等) 4. DESIGN-R に準拠した壊死組織の除去の判断 5. 全身状態の評価と除去の適性判断（タンパク量、感染リスク等） 6. 壊死組織と健常組織の境界判断 7. 褥瘡及び慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去の方法 8. 褥瘡及び慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去に伴う出血の止血方法		
	(B) 創傷に対する陰圧閉鎖療法	1. 創傷に対する陰圧閉鎖療法の種類と目的 2. 創傷に対する陰圧閉鎖療法の適応と禁忌 3. 創傷に対する陰圧閉鎖療法に伴うリスク（有害事象とその対策等） 4. 物理的療法の原理 5. 創傷に対する陰圧閉鎖療法の方法 6. 創傷に対する陰圧閉鎖療法に伴う出血の止血方法		

研修概要	(共通) 創傷管理関連の基礎知識	創傷管理の必要性を理解し、安全に創傷管理を実践できる看護師を養成する。
	(A) 褥瘡又は慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去	医師の指示の下、手順書により身体所見（血流のない壊死組織の範囲、肉芽の形成状態、膿や滲出液の有無、褥瘡部周囲の皮膚の発赤の程度、感染徴候の有無等）検査結果及び使用中の薬剤等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、鎮痛が担保された状況において、血流のない遊離した壊死組織を滅菌ハサミ（剪刃）、滅菌撮子等で取り除き、創洗浄、注射針を用いた穿刺による排膿等を行う。出血があった場合は、圧迫止血や双極性凝固器による止血処置を行う。
	(B) 創傷に対する陰圧閉鎖療法	医師の指示の下、手順書により身体所見（創部の深さ、創部の分泌物、壊死組織の有無、発赤、腫脹、疼痛等）、血液検査結果及び使用中の薬剤等が医師から指示された病状の範囲内にあることを確認し、創面全体を被覆材で密封し、ドレナージ管を接続し、吸引装置の陰圧を設定、モード（連続、間欠吸引）選択を行う。
到達目標	1. 医師の指示の下、手順書により、医療面接、身体所見及び検査結果等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、褥瘡又は慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去ができるようになる。 2. 医師の指示の下、手順書により、医療面接、身体所見及び検査結果等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、創傷に対する陰圧閉鎖療法ができるようになる。 3. 手順書案を作成し、再評価、修正できる能力を養う。 4. 医師、歯科医師から手順書による指示を受け、実施の可否を判断するために必要な知識を養う。 5. 実施、報告の一連の流れが適切に行える。	
評価方法	講義：e ラーニングの受講及び講義確認テスト	
	OSCE：評価表（Mini-CEX）を用いた観察評価	
	実習：評価表（Mini-CEX）を用いた観察評価	
	試験：e ラーニング上で筆記試験を実施	
研修内訳	講義（34 時間）	視聴時間 45 分＋講義確認テスト 15 分
	OSCE	OSCE(1 時間)は、宇治徳洲会病院で行う
	実習	実習は指導者の下、宇治徳洲会病院で行い、各特定行為ごとに最低 5 症例経験する ※各行為の実習観察評価 0.25 時間は 5 症例目の実習時間に含める。
	試験（1 時間）	科目修了試験（筆記試験） 1 時間 （共通）創傷管理関連の基礎知識 0.4 時間 （A）褥瘡又は慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去 0.3 時間 （B）創傷に対する陰圧閉鎖療法 0.3 時間

授業計画						
科目名	回	研修方法 /評価	授業 形態	学ぶべき事項		担当指導者
創傷管理 関連	第 1 回	講義	放送	(共 通) 創 傷 管 理 関連の基礎 知識	皮膚、皮下組織（骨を含む）に関する局所解剖、主要な基礎疾患の管理、全身・局所のフィジカルアセスメント	久保田 良浩 西井 洋一
	第 2 回				慢性創傷の種類と病態、褥瘡の分類、アセスメント・評価、治癒のアセスメントとモニタリング（創傷治癒過程、TIME 理論等）	高田 聡 北山 稔大
	第 3 回				リスクアセスメント、褥瘡及び創傷治癒と体圧分散、褥瘡及び創傷治癒と排泄管理	伊庭 治代 加藤 好美
	第 4 回				褥瘡及び創傷治癒と栄養管理	仲原 英人
	第 5 回				DESIGN-R に基づいた治療指針	日並 淳介

	第 6 回				褥瘡及び創傷の診療のアルゴリズム、褥瘡の治癒のステージ別局所療法	我如古 理規			
	第 7 回				感染のアセスメント				
創傷管理 関連	第 8 回	講義	放送		下肢創傷のアセスメントと病態別治療（1）	久保田 良浩 西井 洋一 高田 聡 北山 稔大 伊庭 治代 加藤 好美 仲原 英人 日並 淳介 我如古 理規			
	第 9 回			下肢創傷のアセスメントと病態別治療（2）					
	第 10 回			下肢創傷のアセスメントと病態別治療（3）					
	第 11 回			下肢創傷のアセスメントと病態別治療（4）					
	第 12 回			創部哆開創のアセスメントと治療					
	第 13 回			(A) 褥瘡 又は慢性創 傷の治療に おける血流 のない壊死 組織の除去	褥瘡及び慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去の目的 （1）				
	第 14 回				褥瘡及び慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去の目的 （2）				
	第 15 回				褥瘡及び慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去の適応と 禁忌（1）				
	第 16 回				褥瘡及び慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去の適応と 禁忌（2）				
	第 17 回				褥瘡及び慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去に伴うリ スク（有害事象とその対策等）（1）				
	第 18 回				褥瘡及び慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去に伴うリ スク（有害事象とその対策等）（2）				
	第 19 回				DESIGN-R に準拠した壊死組織の除去の判断				
	第 20 回				全身状態の評価と除去の適性判断（タンパク量、感染リスク等）（1）				
	第 21 回				全身状態の評価と除去の適性判断（タンパク量、感染リスク等）（2）				
	第 22 回				壊死組織と健常組織の境界判断（1）				
	第 23 回				壊死組織と健常組織の境界判断（2）				
	第 24 回				褥瘡及び慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去の方法				
	第 25 回				褥瘡及び慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去に伴う出 血の止血方法（1）				
	第 26 回				褥瘡及び慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去に伴う出 血の止血方法（2）				
					実習		面接	OSCE 前実習（シミュレーターを用いた実習）	
	OSCE						面接	褥瘡又は慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去	
					実習		面接	褥瘡又は慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去（見 学）	
								褥瘡又は慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去の実施	
				第 27 回	講義		放送	(B) 創傷 に対する陰 圧 閉 鎖 療 法	創傷に対する陰圧閉鎖療法の種類と目的
				第 28 回					創傷に対する陰圧閉鎖療法の適応と禁忌、創傷に対する陰圧閉鎖療 法に伴うリスク（有害事象とその対策等）
				第 29 回					物理的療法の原理（1）
		第 30 回	物理的療法の原理（2）						
創傷管理 関連	第 31 回	講義	放送	(B) 創傷	創傷に対する陰圧閉鎖療法の方法(1)	久保田 良浩			
	第 32 回			に対する陰	創傷に対する陰圧閉鎖療法に伴う出血の止血方法	西井 洋一			

	第 33 回			圧 閉 鎖 療 法	物理的療法の原理（3）	高田 聡
	第 34 回				創傷に対する陰圧閉鎖療法の方法(2)	北山 稔大
		実習	面接		創傷に対する陰圧閉鎖療法（見学）	伊庭 治代
					※患者に実技を行う前にモデル人形等を利用し、技術訓練を行う	加藤 好美
				創傷に対する陰圧閉鎖療法の実施	仲原 英人 日並 淳介 我如古 理規	
	第 35 回	試験	試験	科目修了試験（筆記試験）		

参考図書・資料等	全日病 S-QUE 提供の講義資料をダウンロード
備考	* e ラーニングにおける講義は、各自のパソコンで自宅等で視聴して差し支えない。 * 質問事項がある場合は、全日病 S-QUE が提供する掲示板を参照、あるいは指導者まで連絡、適宜指導を受ける。 * 指導者は、インターネットを通じて受講生の履修状況、設問の回答内容を確認し、必要に応じて指導、質疑に対する応答を行う（祝祭日を除く）。 * 1 回以上レポートの提出を行い、指導者から添削指導を受ける。レポートの内容は学習進度に応じて履修開始後、連絡される。 * OSCE は講義室で行い、Mini-CEX により評価され、基準に達していない場合は、実習を行うことができない。 * 各行為の実習観察評価 0.25 時間は 5 症例目の実習時間に含める。 * 科目修了試験（筆記試験）は、各時間終了後に行われる確認テスト及び実習で学習した範囲より出題し、指導者の監督の下、本人確認を行った上で、講義室で集合して行う。 * 指導者は、必要に応じて受講者の理解を面接等で確認し、理解が不十分と判断された場合は、臨時の講義を行う。講義の場所は、講義室とする。